

講座Ⅱ文学・芸術の基礎理論 1

マルクス主義の文学理論

川口浩・山村房次・佐藤静夫

汐文社

マルクス主義の文学理論

第1巻

川口浩

山村房次 著

汐 文 社

執 筆 者

川 口 浩
中央大学教授

山 村 房 次
日ソ学院理事

佐 藤 静 夫
東京教育大学教授

講座「文学・芸術の基礎理論」
第一巻マルクス主義の文学理論

1974年4月1日 発 行

著 者	川 口 浩 山 村 房 次 佐 藤 静 夫
発 行 者	今 田 保
印 刷 者	田 中 勝 正

発 行 所 汐 文 社

京都市下京区七条河原町西南角
東京都千代田区外神田2の1の4

刊 行 の こ と ば

文学とは何か、ということについては、古今さまざまな語られてきた。それはほとんど語りつくされた、ともいえるほどである。しかし、それにもかかわらず、こんにちにおいても、文学とは何か、と問うこと、また文学について語ることは、われわれにとって、すこしの意味も喪われていない。何故であろうか。それは、文学とは何か、と問うこと、また文学について語ることは、人間とは何か、と問うこと、また人間について語ることと同じように、常に古くかつ新しい問題であるからである。

とくに、時代の変革が深く大きく迫られている今、この歴史的時代の現実とは、今のこの文学にさまざまな映されているばかりでなく、そこにはまた、変革の時代にふさわしく、あらためて文学にかかわる根源的な問いと、文学の歩んだ国内外の歴史への検証が深く求められている。

本講座は、こうした時代の現実と文学のなかに生き、そこに時代とみずからの姿を客観視しようとする若き勤労青年、学生に向けて企てられた。

直接には、これは、そうした若き人びとの学ぶ場としての学園、中央労働学院に、講師として参加しつつあるものの、その担当講義を中心として執筆され、そこに集う若き人びとを念頭にして編まれたものである。

しかし同時に、われわれは本講座を、単に右のこととしてだけに止めず、およそ社会と人間

の合理に適った進歩を求め、文学・芸術と生活の豊饒をこよなく愛する人びと、そのより広い人びとに向かって、またものごとの真理を求め、文化・文学・芸術諸ジャンルのになう原理的諸問題について、より深く科学的な理解を得ようと志す人びと、国内外の文学の歴史について、一層の立ち入った把握を志す人びと、そのより広い人びとに向かって、差し出すことを考えてこれを編みこれらの筆をとった。

もとより、紙数の制限その他により、われわれの意図が十全にここに果されているとは考えていないが、文化・文学・芸術諸ジャンルについて、その理論と歴史のあゆみを、今のこの時代をふまえて可能なかぎり明らかにしようとして試みられた本講座について、忌憚ない意見、批判が寄せられるならば、われわれにとってこの上なき倖である。

講座「文学・芸術基礎理論」編集委員会

目次

マルクス主義の文学・芸術理論

第一部 マルクス・エンゲルスの文学・芸術論……………川口 浩

第一章 マルクス・エンゲルス芸術論研究の過去と現在……………三

一、初期マルクス主義芸術理論家たち……………三

二、マルクス・エンゲルス芸術論の意義……………七

三、「芸術論」の集大成事業……………二一

第二章 イデオロギーと史的唯物論……………一九

一、唯物論歴史観の基本原理……………一九

二、イデオロギー諸現象の考察方法……………二三

第三章 上部構造と下部構造……………二六

一、公式主義的歪曲への警戒……………二六

二、両者の相互作用……………二六

三、物質的生産とたとえば芸術的生産との不均等的関係……………三三

四、上部構造の相対的独立性……………三六

五、上部構造の社会的役割	四
--------------	---

第四章 反映論の立場からみた文学の芸術上の諸問題（リアリズム論）	三
----------------------------------	---

一、文学・芸術の本質	三
------------	---

二、芸術的タイプの創造（虚構の必然性）	三
---------------------	---

三、傾向性と芸術性	三
-----------	---

第二部 レーニンと文学の諸問題	山村房次
-----------------	------

はじめに	七
------	---

第一章 レーニンの反映論と作品評価の客観的基準	八
-------------------------	---

第二章 認識における空想・先走りの役割	八
---------------------	---

第三章 社会的タイプと文学における典型	九
---------------------	---

第四章 ロシア革命の鏡	九
-------------	---

第五章 文学における党訓性の原則	一二
------------------	----

第六章 革新と伝統の問題	一三
--------------	----

第七章 党の文学指導の模範	一四
---------------	----

第三部 日本におけるマルクス・レーニン主義	佐藤静夫
-----------------------	------

第一章	はじめに	一七
第二章	蔵原惟人のリアリズム論の展開	一八
第三章	蔵原惟人の文学芸術の階級性についての理論的展開	二六
第四章	宮本顯治の「政治と芸術」論	三〇
第五章	宮本百合子の社会主義リアリズムの受け止め	三九
第六章	戦後における蔵原惟人の理論的展開	四七
第七章	おわりに	五八

第一部 マルクス・エンゲルスの文学・芸術論

第一章 マルクス＝エンゲルス芸術論研究の過去と現在

一 初期のマルクス主義芸術理論家たち

マルクス主義の理論を学ぶさいには、なによりもまずその始祖の原典にづかなければならないことは、まことに当然なことであろう。経済や政治や社会運動などの領域はもとより、文学や芸術などのようなイデオロギー上の領域とても、けっしてその例外ではありえない。原典をないがしろにして、セカンド・ハンドの知識で間に合わせたりしたら、とんでもない誤解に陥るおそれがある。ダイジェストにたよるのは、なるほど安直かも知れないが、それだけに終始していたら、ほんとうの勉強にはならない。困難や不便はあっても、それにめげずに、本元に忠実に従わなければならない。このことをまずしっかりと心にきざんでおく必要がある。

以上はわれわれ学習者、研究者の心得について述べたものだが、この原典重視の見地をば過去のいわゆるマルクス文芸理論家たちが守っていたかという点、遺憾ながら、むしろその反対

であつた。彼らの大半はマルクス・エンゲルスの文芸上の諸見解を無視または輕視し、それ
 れが自分なりの見解を打ち出して、これを「マルクス主義的」と称していたのである。かつて
 權威ありとされていたマルクス主義文芸理論家のおもな人たちについてこれを見よう。

ロシア初期マルクス主義の理論家としてゲオルギ・ヴァレンティノヴィチ・プレハーノフ
 (一八五六—一九一八年) という人があつた。彼はロシアにおけるマルクス主義の父といわれ、
 その初期の著作、とりわけ哲学上の諸著作については、レーニンから「國際的なマルクス主義
 文献中最上のもの」と折紙をつけられたほどである。にもかかわらず、彼の發表した多くの文
 学・芸術論上の著作では、マルクスやエンゲルスの見解がほとんど取り上げられずに、イポリ
 ット・テーヌ(一八二八—一九三年) カール・ビューヒャー(一八四七—一九三〇年) エルンスト・
 グローセ(一八六二—一九二七年)等、ブルジョア社会学的実証主義的芸術論によつて、マルク
 ス主義芸術理論の補完の試みが行われたのである。プレハーノフの芸術論上の仕事はすべて学
 ぶに足りないというわけではないが、マルクス・エンゲルスの諸見解の意義が正しく認知され
 ていなかったことはたしかである。

次に、プレハーノフと並んで、同じく当時有数のマルクス主義理論家、歴史家と目されてい
 たドイツのフランツ・メーリング^(三)(一八四六—一九一九年)の場合はどうだったであらうか。彼
 はエンゲルスの直弟子で、『カール・マルクス——その生涯の歴史』(一九一八年)や『マル

クス＝エンゲルス＝ラサール遺稿集』（一八四一—一八五〇年 全四巻）のような、彼らに直接関係した著書があるのに、こと文学・芸術上の問題にかんしては、彼らの見解を重んじていない。彼は右の『遺稿集』を編集するさいに、エンゲルスの初期の論文『カール・グリューン著人間的立場から見たゲーテについて』（ダルムシュタット、一八四六年）を評す』（一八四六年末から四七年初めごろにかけて執筆、一八四七年冬『ブリュッセル・ドイツ語新聞』に発表）を採録しなかったが、その理由たるや、彼が注解のなかで説明したところによれば、これはマルクス（メーリングは筆者をマルクスと勘違いしていたようである）の個人的な文学趣味を表わしたものであって、マルクス主義的な文学理論とは受け止めかねるからだと言うのである。

メーリングは美学や文学理論のうえでは、カント（一七二四—一八〇四年）やシラー（一七五九—一八〇五年）の業績を重んじて、ヘーゲル（一七七〇—一八三一年）やゲーテ（一七四九—一八三二年）のそれを等閑視した。こういう方向は、マルクスやエンゲルスがこれらの人々にたいして示した評価とは、著しく食い違っている。メーリングが文学・芸術問題の討究にあたり、マルクス＝エンゲルスをこの道における素人扱いにしたことは、必ずしも右の事柄と無関係ではない。

さらに、マルクス主義的な「芸術社会学」の樹立者とかつて言われていたソ連の学者、ウラ

ジミール・マキシモヴィチ・フリーチエ（一八七〇—一九二九年）や彼に追隨した多くの芸術学者たち（今日では「俗流社会学」派と呼ばれる）の場合も例外ではなかった。彼らはおよそ次のように信じていた——一般の歴史や哲学や政治や経済の領域では、マルクス主義の始祖たちは一連の古典的な模範をのこしてくれた。しかし文学・芸術の領域にはそれがない。たまたま彼らに文学・芸術問題についての言及があるにしても、それらは彼らの単なる偶然的な意見の發表にすぎない。われわれにあるのは、ブレハーノフやメーリングのいくつかの著作だけである。だから、ここでは彼らの指示から学ぶと同時に、さらには、現代の「文化社会学」や「芸術社会学」からも学び、その諸発見の助けを借りて新しい創造を行わなければならない、と。

こういった偏向は、ソ連やドイツにおいてばかりでなく、国際的にも、マルクス主義文芸理論家たちの支配的な潮流であった。こうしてブレハーノフやメーリングを初めとして、ボグダーノフ（一八七三—一九二八年）やハウゼンシュタイン（一八八二—一九五七年）やフリーチエなどの俗流社会学説が事ごとに前面に押し出され、また時にはヴォリンガー（一八八一—一九六五年）やヴェルフリーン（一八六四—一九四五年）のようなブルジョア的形式主義の様式芸術学までが引き合いに出されたほどである。

マルクス主義の先進国でさえこういう状態だったのだから、一九二〇年ごろからやっとマルクス主義を知るようになったわが国で、その文学理論、芸術理論を摂取しようとつとめた人た

ちが、マルクス＝エンゲルスの文学・芸術論の存在にすら気付くことなく、もっぱらブレハーノフやメーリングなどを通じて、セカンド・ハンドのマルクス主義芸術理論にたよったことは驚くに足りない。

二 マルクス＝エンゲルス芸術論の意義

マルクス＝エンゲルスの文学・芸術論の重要な意義が確認されて、これにたいする研究が熱心に行われるようになったのは、世界最初の社会主義国ソヴェト連邦では一九三〇年ごろから、わが国では太平洋戦争終結後のことである。

かつてはマルクス主義の始祖たちの芸術論にたいして、それにふさわしい評価が行われなかった一つの大きな根拠は、彼らの発言がすべて断片的ないし部分的であって、まとまった形の系統的な著書はもとより、独立の論文すらほとんどないということであった。このことから文学・芸術問題では、彼らから学ぶべきものはまずなからう、という憶断が生じたのである。

しかし文学・芸術問題について専門的な著述を残さなかったからといって、マルクス＝エンゲルスが文学・芸術のわからない門外漢だったわけではない。それどころか、彼らがこの問題

にたいしてどんなに深い関心と広い理解をと持っていたかは、これから本書で詳しく見てゆくであろうとおりである。

彼らが史的唯物論、弁証法唯物論の見地から文学・芸術現象を研究して、マルクス主義的ないわば「百科全書」の一環を作り上げる意図を持っていたことは疑いない。彼らは芸術的創造に大きな意義を認めてその研究、とりわけ各時代や各民族の文学の研究に絶えず関心を寄せていた。彼らの遺稿のうちには極めて広汎な構想を蔵したものがあって、それらは、古代文学からアイルランドの建築術に至るまでの、芸術の多様な形式と段階との研究を目ざしている。またたとえば一八五七年五月下旬マルクスが『ザ・ニュー・アメリカン・サイクロपीディア』（一八五八年—一八六三年、全一六巻）の主要編集部員チャールズ・デーナ（一八一九—九七年）から、この百科辞典のために、他の諸項目に加えて美学論文をも執筆して欲しいという依頼を受けたとき、マルクスはその準備作業としてドイツやフランスの百科辞典から美学上のノートを取っており、そのなかにはヘーゲル中央派の美学者F・T・フィッシャー（一八〇七—八七年）の『美学』（一八四六—五七年、全六巻）からの詳しい抜き書きもあることから見て、執筆は結局実現しなかったとはいえ、当初はたぶん執筆の意欲を持っていたことがうかがわれる。『資本論』の前身ともいふべき『経済学批判』、そのまた一般的概略ともいふべき「序説」が書かれたのもこのころで、その記述は第四節、ギリシャ芸術およびシェークスピア文学の現代にた